

Economic Indicators

発表日:2020年2月17日(水)

貿易統計(2021年1月)

～アジア向けを中心に輸出は大幅増だが、春節の影響も。貿易赤字は前年比で大きく縮小～

第一生命経済研究所 調査研究本部 経済調査部

エコノミスト 奥脇 健史 (TEL:03-5221-4524)

		貿易収支(億円)				輸出数量				輸入数量					
				輸出金額		輸入金額				アメリカ		EU		アジア	
		原数値	季調値	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	
20年	2月	11,066	3,670	▲1.0	▲13.9	▲2.4	▲4.5	▲9.7	▲0.9	▲17.3	▲11.1	▲8.5	▲25.0		
	3月	72	▲2,396	▲11.7	▲5.0	▲11.2	▲15.9	▲9.1	▲10.5	▲2.4	▲1.8	▲2.6	▲2.6		
	4月	▲9,312	▲9,241	▲21.9	▲7.1	▲21.4	▲36.9	▲27.7	▲11.8	1.4	4.2	▲0.2	5.6		
	5月	▲8,413	▲5,232	▲28.3	▲26.1	▲27.3	▲49.4	▲34.8	▲11.4	▲14.5	▲22.8	▲26.3	▲8.7		
	6月	▲2,729	▲3,286	▲26.2	▲14.4	▲27.0	▲47.0	▲33.0	▲17.7	▲0.8	▲12.7	▲6.2	0.0		
	7月	71	1,328	▲19.2	▲22.3	▲22.0	▲21.5	▲36.7	▲11.3	▲13.9	▲28.0	▲12.6	▲10.8		
	8月	2,444	3,717	▲14.8	▲20.7	▲14.9	▲20.1	▲27.5	▲7.3	▲11.5	▲22.4	▲15.1	▲7.5		
	9月	6,837	4,707	▲4.9	▲17.4	▲7.8	▲6.1	▲23.3	▲3.7	▲8.4	▲16.5	▲3.3	▲7.7		
	10月	8,692	4,487	▲0.2	▲13.2	▲1.7	0.8	▲10.9	2.8	▲5.7	▲21.4	▲8.3	▲2.7		
	11月	3,625	5,920	▲4.2	▲11.1	▲4.0	▲2.6	▲9.8	▲4.5	▲2.3	▲19.3	▲12.9	4.3		
	12月	7,496	5,123	2.0	▲11.6	▲0.1	▲3.4	▲18.4	5.2	▲2.0	▲22.7	▲0.9	1.8		
21年	1月	▲3,239	3,928	6.4	▲9.5	5.3	▲8.7	▲26.1	18.4	▲4.3	▲10.6	▲11.0	▲2.9		

(出所)財務省「貿易統計」、前年比(%)

○春節時期のずれの影響からアジア向けを中心に輸出が前年比で大幅増加

財務省より発表された1月の貿易統計によると、貿易収支は▲3,239億円の赤字(コンセンサス:▲6,250億円の赤字、レンジ:▲10,100億円の赤字～▲1,491億円の赤字)となり、コンセンサスを上回る結果となった。輸出金額は前年比+6.4%(コンセンサス:同+6.8%、レンジ:同▲1.0%～同+10.5%)、輸入金額は同▲9.5%(コンセンサス:同▲5.5%、レンジ:同▲18.1%～同▲0.3%)となった。

品目別にみると、輸出については、世界的な半導体需要を反映し半導体等製造装置(同+50.5%)、半導体等電子部品(同+11.4%)が大幅な増加となったほか、引き続きプラスチック(同+30.4%)、非鉄金属(+31.1%)などが前年を上回った。輸入については、原油(同▲41.9%)、石炭(同▲22.1%)などの大幅な減少が続いたほか、衣類・同付属品(同▲27.6%)などが減少に寄与している。一方、テレワーク需要などから通信機が同+49.2%、PC等の電算機類(含周辺機器)が同+24.3%と前年を大きく上回っている。

季節調整値でみると、輸出金額は前月比+4.4%、輸入金額は同+6.9%とともに大きく増加、輸入の伸びが輸出の伸びを上回ったため、貿易収支は3,928億円の黒字と12月から縮小した。

なお、輸出については、中国向けが+37.5%と前年を大幅に上回る結果となったことにより高い伸びとなった。中国向けはもともと堅調に推移していたことに加え、春節の時期のずれ(昨年は1月末、今年は2月)が影響している。そのため、今回の結果については割り引いて考える必要があり、1、2月の結果を均して判断すべきだろう。

○実質輸出は前月比+4.4%、アジア向けを中心に高い伸びに

為替などの価格変動の影響を除いた1月の実質輸出(実質化・季節調整は第一生命経済研究所試算)

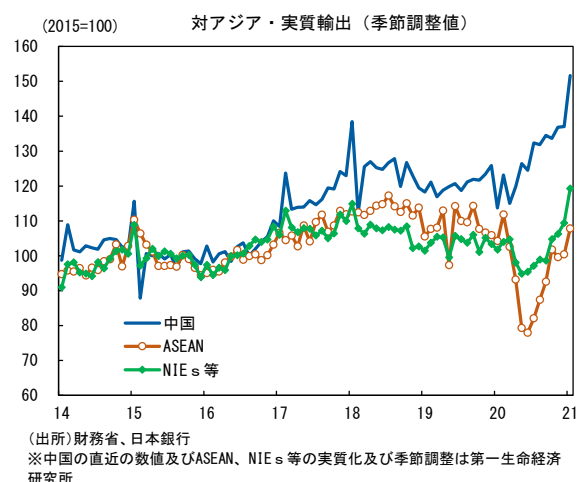
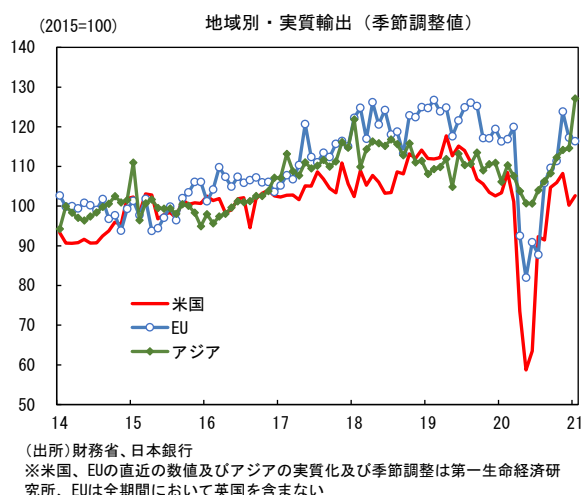
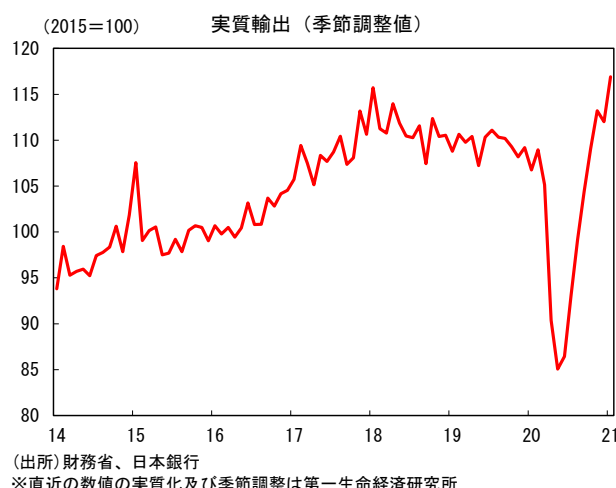
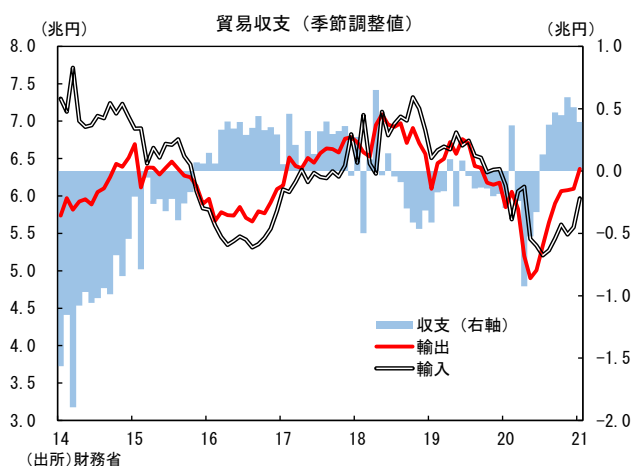
は、前月比+4.4%（20年12月：同▲2.2%）の増加となった。米国向けが同+2.4%と増加に転じたほか、アジア向けが同+10.9%と高い伸びとなったことが実質輸出の増加に寄与した。アジア向けの大幅増加については、前述のとおり中華圏の春節時期のずれが影響しているため、今回の結果については割り引いてみる必要があるだろう。2月の結果も合わせて判断したい。一方、EU向けは同▲0.8%と減少が続いた。新型コロナウイルスの感染状況の悪化に伴い、各国で経済活動の制限措置が取られたことが影響しているとみられる。

品目別にみると、金属・同製品が同+8.4%、一般機械が同+6.1%など、幅広い品目が12月から増加したとみられる。20年6月以降、実質輸出をけん引してきた輸送用機器は同+1.0%と増加したものの、各国でのペントアップ需要の剥落などから足下で持ち直しは一服している。

○20年10-12月期から輸出の増加ペースは鈍化も、世界経済の回復から増加基調は続く見通し

先行きについては、各国で新型コロナワクチンの接種が進んでいるほか、経済活動の制限が行われている中でも製造業は好調を維持しており、米国、中国向けを中心に今後も輸出の増加基調は続くと思われる。もっとも、世界経済の回復は緩やかなものにとどまる見通しであることや輸出の持ち直しをけん引してきた自動車の輸出の増加ペースが一服していることなどから、輸出の増加ペースは20年10-12月期から鈍化することが見込まれる。輸入については、日本での経済活動正常化が進むことに伴い持ち直していくとみられるが、緊急事態宣言発令に伴い1-3月期の景気失速は不可避の状況で、輸入の持ち直しは遅れる可能性がある。

今後もリスクは引き続き新型コロナウイルスの感染動向である。変異種の感染拡大やワクチンの供給不足なども懸念されており、世界経済の回復が遅れることとなれば、輸出の下押し圧力となるだろう。



本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所調査研究本部経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見通しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。